

語彙指導の諸問題と 語彙学習方略の習得をめざした指導

茨城県立下妻第一高等学校 教諭 川 貞夫

概要

大学進学を希望する学生の多い高校では、3年間で大量の語彙を学ばなければならないために、語彙指導の課題となる事項に十分に対応していないことがある。

語彙指導の課題となる事項から、1)教科書語彙の定着、2)単語集の活用、3)副読本の語彙、4)語彙に関する基本事項、5)コロケーション、6)生徒自身の語彙学習の把握について、具体的に問題と改善策を示すこと、さらに、指導によって生徒が有効な語彙学習方略を身につけられることを検証することが本実践研究の目的である。一学年を対象に一学年担当の英語教員全員の協力のもと実践を行った。

10月に語彙方略に関する生徒へのアンケートを行い、中学時代と比べ語彙学習方略に変化があったかを、さらに個々の語彙学習方略と単語テストや模試の成績との相関を調べた。

検証を通して、語彙指導の改善を図る継続的な授業実践が、生徒たちの語彙学習方略の獲得に役立っていることを示すことができた。

1 はじめに

1.1 研究の背景

1.1.1 語彙学習方略の必要性

大学進学を希望する学生の多い高校での英語指導で問題になることの1つに、中学の学習語彙と、高校で学習する語彙、さらには大学入試で要求される語彙との間に大きな隔たりがあり、高校3年間で、大量にしかも深い理解を伴った語彙の習得が必要に

なることがある。そのことを3年間で達成するためには、語彙学習について、早い時期から自主的な取り組みができることが望まれる。

語彙を習得するために学習者がとるさまざまな手段や方法は、語彙学習方略(VLS: Vocabulary Learning Strategies)と呼ばれる。自らそうした学習方略を発見して自主的に単語学習に取り組むことができる生徒もいるが、多くは授業や課題などの指導を通して、個々の語彙学習方略とその有効性を示され、学習を繰り返すことで、初めて身につけられるものである(Nation 2001: 223)。

しかし、必要とされる大量の語彙を目の前にして、語彙指導が単に覚えることを強要することにとどまってしまうことも起こりうることである。指導方法や指導体制が十分整っていないと。

1.1.2 語彙指導の課題

本校では、ほとんどの生徒が大学進学を目標としており、3年間で入試に対応できる語彙を身につけることを語彙指導の目標にしている。そのために学年担当者が共通の理解のもとに3年間の計画を立て語彙指導を行っている。しかし、現在までの指導を振り返ると、次のような点で課題が感じられた。

- 1)教科書の語彙が重視されて、繰り返し学ばれているか
- 2)単語集および単語集に基づいた朝の単語テストは適切に活用されているか
- 3)副読本が語彙習得に役立っているか
- 4)発音記号・接辞・派生辞・つづりの法則などの語彙に関する基本事項が理解され利用され

- ているか
5) コロケーションは学ばれているか
6) 生徒は自らの語彙学習を把握しているか

1.2 本研究の目的

語彙指導は年間を通した指導計画ができていると、見直す機会を持つことが難しい。ここに示したような語彙指導に関する課題を見直し、先行する語彙指導研究を参考にしながら改善することを第1の目的としている。さらに、指導によって生徒が有効な語彙学習方略を身につけられるようになるかを、検証することが本研究の目的である。

1.3 研究の参加者および期間

本実践研究を行った高校は茨城県西部にあり、ほとんどの生徒が大学進学をめざし、毎年100名以上が国公立大学への進学を果たしている普通科・男女共学の高校である。1学年7クラス、計279名を対象とし、1学年担当の英語教員全員の協力のもとに行った。実施期間は平成24年4月から25年2月末までである。

1.4 検証の方法

語彙方略に関する生徒へのアンケート、単語テスト、全国的模試の英語の成績などを使って、改善のために使われた指導法が、語彙学習方略の獲得に役立っているかを、次の点から検証する。

- 1) 中学時代と比べ、語彙学習方略にどのような変化があるか
- 2) 語彙学習方略と成績には相関があるか

2 語彙学習方略と本研究の意義

2.1 語彙学習方略について

学習者が外国語の語彙を理解し、記憶にとどめるための方法である語彙学習方略（VLS：Vocabulary Learning Strategies）は、外国語学習者が外国語習得のためにとるさまざまな手段や行動である言語学習方略（LLS：Language Learning Strategies）の1つである。しかし、語彙学習の重要性から、独立して研究されることが多い。

例えば、Schmitt and Schmitt（1993）は、日本人の英語学習者への調査やさまざまな資料から、36の

語彙学習方略を抽出し分類を試みている。それらをもとにして、600人の日本人の英語学習者への調査から、日本人学習者に好まれて使われる方略と、好まれない方略とを示した。

さらに、Schmitt and McCarthy（1997）およびSchmitt（2000: 134）はOxford（1990: 14）の分類法を利用して、決定方略（determination strategies：新しい語の意味を発見するための方略）、社会的方略（social strategies：他の人と相互作用する方略）、記憶方略（memory strategies：記憶保持のための方略）、認知的方略（cognitive strategies：書いたり、声に出したりという具体的な学習の方略）、メタ認知的方略（metacognitive strategies：プロセスを概観し、勉強法を計画する方略）に分類している。

また水本・竹内（2009: 11）は、因子分析によって、自己管理、インプット探索、イメージ化（意味やつづりをイメージして覚える方略）、書き取りによる反復、音声利用による反復、関連化に分類している。

これらの方略の中で、メタ認知的方略、あるいは自己管理方略は、学習全体を管理、調整し、学習計画、評価、学習環境整備を行うことに関する方略であり、自立した学習に不可欠なものと指摘されている。

本研究では、生徒へのアンケートに使った語彙学習方略の項目は、Schmitt（2000: 134）の分類に基づく野呂（2003: 299）の簡略リストをもとにしている。

2.2 日本の高校生を対象とした語彙学習方略研究

平野・赤松・姉崎（2001）は、中学3年生174名と高校3年生149名に調査を行い、学習経験年数および性差が、英語語彙学習方略に与える影響を調査した。その結果、「男女でまた学習経験年数によって好まれる語彙学習方略が異なる」ことを確認し、「中学までは男女ともに、意識して文脈・反復重視の語彙学習を行っているのに対して、高校に入ると男子は女子に比べて意識して単語を書いたり英文を読んで覚えたりする練習をしなくなる」という考察を示している。

赤瀬（2011）は高校の2・3年生を対象として、「望月語彙サイズテスト（望月・相澤・投野, 2003）の改定版を使い、語彙サイズテストと語彙学習方略調査を実施して、201人を分析し、語彙レベルの異なる高校英語学習者がどのようなVLSを使用するかについて調べている。また因子分析により、

Schmitt (2000) とは異なる分類を示している。その中で、どの語彙レベルの学習者においても口頭反復方略が典型的な VLS であることの結果から、「教師の(途中省略)語彙指導の結果が反映されている」のではないかという考察を示している。また語彙レベルが上がっていくにつれて、体制化方略(これまでに記憶した英単語と関連づけながら覚えていく方略)と、イメージ化方略が使われること、また3,000語レベル学習者からは、メタ認知を使った学習方略が見られることを確認している。

岡田(2007)は、高校生244名に対し、接頭辞、接尾辞、語幹に関するプリント学習を行うことで、学習動機づけ、方略思考、単語の重要度への認識の高低にかかわらず、接頭辞、接尾辞、語幹を用いる方略が学習意欲を高めることを示している。

2.3 本研究の目的と語彙学習方略

平野他(2001)、赤瀬(2011)の研究は高校生の語彙学習方略を調査し、どのような方略が使われているかを調べている。岡田(2007)の報告では、接頭辞、接尾辞、語幹を使う方略が学習意欲を高めるとしているが、この方略の他に、計画性や継続的な練習を必要とする VLS も多い。1つの方略の結論から、すべての VLS が生徒の学習意欲を高めるとは言えないであろう。

本研究では、生徒の語彙学習方略を調査するだけでなく、語彙指導を通して、生徒が語彙学習方略を身につけられることを検証すること、また1つの方略だけでなく、語彙指導に関係するさまざまな課題の改善を図りながら、学習方略を身につける指導を行うことを目的としている。

3 実践内容

課題として挙げた6点(1.1.2節参照)について、問題点を整理し、対策を立て4月からの授業で実践した。

3.1 教科書の語彙

3.1.1 問題点：繰り返し学ばれていない

本校で使用している英語Ⅰの教科書では、固有名詞を除いて約500の新語を学習する。授業では、内容理解、内容に関する英問英答、音読指導、文法事

項の解説と練習といったインプット・アウトプットの活動をしており、新出語彙については、授業を通して何度も触れられ、受容語彙としてばかりでなく、発表語彙としても学ばれている。

しかし、定期試験で出題された後は、次の課の学習に焦点が移り、再び学ばれることがない。Schmitt (2002: 831) が、「多くの教師の犯す過ちは、新出語に1度しか焦点を当てないことだ。そのためにその語(新出語)は忘れられてしまい、費やされた時間は無駄に終わってしまう」と指摘している状況にある。

3.1.2 対策：繰り返しての出題

1度学んだ語を繰り返して学び直すことを Schmitt (2002: 831) は、リサイクリングと呼んで推奨している。単語集を持たせて朝のホームルーム時に単語の試験を行うことがよく行われ、本校でも単語集を持たせるようになってから実施している。その朝の単語テストに教科書から出題をすることで、生徒が教科書で1度学んだ語彙を復習する機会を増やすこととした。さらに、次の課の定期テストにも範囲外ではあるが、復習として出題(得点は1題0.5点で計算)し、また長期休業後の課題テスト、ロングホームルーム時の課題テストにも出題することとした。授業では、忘却曲線を示しながら、繰り返して学ぶことの必要性を機会をとらえて話した。

3.2 単語集

3.2.1 問題点：単語集および単語テストの使われ方

大学入試対策として、同じ単語集を一括で購入して、その単語集をもとに、朝のホームルーム時に週1回の割合で小テストを行っている。そのテストの扱いは担当する学年によって違っているが、おおむね1年間で単語集に出ている語をすべて学習させるために、総ページから機械的に範囲を決め、朝の単語テストに出題することが多い。授業中では取り扱わず、合格点を決め、それに達しない生徒には追試をすることを毎週繰り返すことも行われた。

このような追試までを含んだ指導をした場合、生徒は追試対策のために単語集の単語を覚えようとするかもしれないが、教科書の単語さえ覚えられない生徒は、本来身につけるべき教科書の語彙をおろそかにしてしまう。受験のために語彙を増やそうとし

て、早期から単語集を使い、教科書の語彙が軽視される問題について、金谷（2009）は次のように指摘している。

大学入試が仮に、生徒に対して、多くの語彙を学ぶことを要求していたとして、教師があせってそのすべてを生徒に与えても、生徒がそれを受け取らないのでは意味がない。

教科書の語彙だけでは不十分だとして、単語集などを買わせて小テストを繰り返したとしても、教科書の語彙も定着していない場合、虻蜂取らずに終わってしまう可能性がある。単語集の語彙も身につけていないが、教科書の方も身につけていない。これでは学習効率がきわめて悪い。（金谷, 2009: 9）

3年の受験期になると、多くの生徒は単語集を使い、自主的に単語の整理や復習、未習得の語の学習を始める。1・2年の段階から計画性を持ち、教科書の語彙も十分に身につけ、単語集の語彙を学習している生徒もいる。さらに、朝の単語テストが、そうした計画性を身につける契機ともなりうる。

しかし、教科書の語彙すら覚えられていない生徒も多い。そうした生徒にとっては、追試まで課して単語集で学ぶことを強要することは、授業で学ぶ語彙すら未消化なのに、発音や使い方さえ示されたことのない語を自学で覚えなければならないという、金谷の指摘のように「学習効率がきわめて悪い」ことになってしまう。

3.2.2 対策

1) 単語集の位置づけへの共通認識

語彙も含めて中心になるのは教科書を基本とした授業であり、単語集の指導は補助的なものであるということを共通認識とした。

単語試験の合格点（60点）は設定するが、合格点に達しなかった者については、ノートを作らせ、あるいは用紙を渡して、できなかった単語を何度も書いて復習させ提出させることとし、追試は行わないこととした。

2) 授業で単語集の指導を行う

単語集は朝のテストに出題するばかりでなく、英語Ⅰの授業中も扱うこととした。毎時間行えるとは限らないが、55分の授業時間の初めの10分ほどを、単語集を使って、単語集に出てくる語や例文の音声

CDを聴き、繰り返ししたり、いくつかの語について語法や用例の説明、派生辞・接辞の説明を行った。限られた時間ですべての語については触れられないが、残りは生徒が自分で学ぶように指示をし、次の授業時に簡単なテストを行った。また、4・5月は発音記号を集中的に学習した。

3.3 副読本と語彙

3.3.1 問題点：直接的な語彙の強化につながらない

副読本の指導には、英語の蔵書を用意し、生徒に自由に選ばせる方法と、全員に同じ本を配付して読ませる方法がある（泉, 2006: 119）。前者は蔵書のための予算的な問題と、テストなどの評価の問題があるため、後者の方法がとられることが多い。いずれにしても、副読本の導入の利点としては、教科書だけでは不十分なインプットを補い、さらに教科書では得難いこととして、ストーリーを楽しむことや、1つのトピックを深く読むことができることが挙げられる。

しかし、語彙の面から見ると、Nation（2001: 155）の指摘するように、語彙との出会いは偶発的で、「根本的に多読からの語彙習得は大変脆弱」なものであり、「直接的な学びによって補う必要」がある。

3.3.2 対策：授業で扱い、覚えるべき語を提示する

全員に同じ本を配付して、読ませる方法をとっている。一斉に配付して読ませる方法の問題点としては、配付しても読まない生徒が出てくることがある（川, 1993）。そうした生徒を出さないために、また音声聴くために、本実践では1学年ではOCの時間に10分から15分を使い授業で取り扱うこととし、副読本に付いているワークブックの答え合わせをし、音声CDを聞くことにしている。

英語学習者向けに段階的に語彙・文法・分量を制限しているgraded readersを使うことが多い。ワークブックが付いていないときは、付属しているActivities欄をもとに教師がワークブックを作成する。生徒は授業までに決められた章を読んで、ワークブックを完成させてくる。

語彙に関しては、つづりまで覚えておくべき単語のリストを副読本の語彙から作り、生徒に示し、そ

のリストから朝の単語テストに出題することとした。またワークブックに覚えるべき語のリストがある場合はそれを利用した。

1 年次では読んでいる本のほとんどが graded readers の 1 から 2 なので、日常語彙が多い。その中から教科書にはない、未習得の語60前後を選び、リストアップして単語テストに出題している。単語テストは 1 冊を 2 回で出題するので、1 回につき30 前後の新語を覚えることになる。

3.4 単語小テスト

以上の理由で、朝のホームルーム時の週 1 回の小テストは、教科書・単語集・副読本の 3 つの分野から出題することとした。

3.4.1 テストの形態について

単語テストは、英単語から意味を問うものにも、あるいは選択問題とすることもできた。しかし、生徒が単語の深い習得をするためには、つづることができ、文の中でどのように活用するかを知っていることが必要であることから、単語テストは、英文中の空所に正しい活用で単語を書き込む空所補充問題とした。空所補充問題が、cloze-test であり、筆記の試験でありながら、「規準を決めることで客観テストになる」(Bachman, 1990: 76) ことも、この方法を採用した理由でもある。

さらに、テストの一貫性のためにも、空所補充の形態を変えずに 1 年間継続した。

■ 表 1：単語テストの日程

回	日時	範囲	回	日時	範囲
1	4/27	単語集 p.55 まで	14	10/26	副読本④前半
2	5/11	副読本①	15	11/9	英 I Lesson 5 全
3	5/18	英 I Lesson 1 全	16	11/16	副読本④後半
4	6/1	単語集 p.72 まで	17	12/7	単語集 p.190 まで
5	6/15	英 I Lesson 2 全	18	12/14	英 I Lesson 6 全
6	6/22	副読本②	19	1/11	単語集 p.221 まで
7	7/6	単語集 p.107 まで	20	1/18	副読本⑤前半
8	7/13	副読本③前半	21	1/25	英 I Lesson 7 全
9	9/14	単語集 p.134 まで	22	2/1	単語集 p.248 まで
10	9/21	副読本③後半	23	2/8	副読本⑤後半
11	9/28	英 I Lesson 3 全	24	2/22	単語集 p.274 まで
12	10/5	英 I Lesson 4 全	25	3/8	英 I Lesson 8 全
13	10/12	単語集 p.159 まで	26	3/15	副読本⑥前半

3.4.2 作成・基準・実施日・出題範囲

1 学年担当者が作成し、クラス持ち回りの生徒による採点とし、教員が点検をした。5 点×20 題、計 100 点満点とし、採点の基準は、同義語で正しいものは正解としたが、つづり・活用の間違いは点を与えなかった。毎週金曜日の朝のホームルーム時の 5 分間内で実施した。実施日・出題範囲は表 1 のとおりである。具体的なテストの例は、教授資料 1 として示した。

教科書は、Unicorn English Course I (文英堂)、単語集は DataBase 3000 (桐原書店) を使用した。使用した副読本は表 2 に示した。

3.5 語彙に関する基本事項

発音記号は高校の授業では、授業の開始時期に示されるだけで散発的にしか指導されないことが多い。また接辞・派生辞・つづりの法則などについては、教科書の各課の終わりに解説とともに掲載されているが、授業に組み込まれ、継続的に練習するようにはなっていない。

3.5.1 発音および発音記号について

1) 問題点：継続的に指導されていない

発音記号について、相澤・望月 (2010: 236) は、「最近では電子辞書でほとんどの単語の発音を聞けますから、発音記号の指導はあまり行われていないのが現状」と指摘している。実際に高校入学後、生徒に尋ねると、発音記号は中学校では、繰り返して学ぶこ

■ 表 2：副読本のリスト

NO.	Title	出版社・シリーズ名	Level
①	After 20 years	文英堂 (After 20 years 収録)	800 語 レベル
②	A Retrieved Reformation		
③	Secret of Jack's Success	エスト出版	Basic
④	Blood Diamonds	Cambridge English Readers	Level 1
⑤	Elephant man	Oxford Bookworms Library	Stage 1
⑥	Water for Life	Penguin Active Reading	Level 2

とはほとんど行われていなかった。

しかし、電子辞書の発音を正確に聞き取ることができるほど、英語を聞くことに慣れていない大半の生徒たちにとって、発音を目で確認するために、発音記号は有益である。さらに、発音記号を知らないために例外的な発音や黙字を読み間違えることが起こる(相澤・望月, 2010: 236)。

2) 対策:

a. 単語集を使つての継続的な指導

単語集には、発音記号と発音の仕方についての簡単な説明と例となる語が示され、練習問題が付いている。授業の初めの10分を単語集を使つての指導に充てているが、4・5月の2か月は、初めの3分程度を使つて発音記号ごとに発音の仕方を解説し、練習をしながら発音記号を覚えることを繰り返した。

b. 定期試験での出題

1学期の定期試験では、通常の発音問題ではなく、単語から正しい発音記号を選ぶ問題を出題した。

c. 発音記号から新出語の発音を類推させる

授業では、教科書の新出語は、生徒を指名して文字と発音記号だけで発音をさせ、それからCDの模範音声を聞くことを繰り返し、発音記号を普段に使うことを続けている。

3.5.2 つづりの法則について

1) 問題点: つづりへの意識の低さ

つづりを正しく書くことへの意識が年々低下しているように思われる。nature のつもりで、neichure とするように発音をそのまま書いてしまう例、docter というつづり、「右」のつもりで light と書く答案も散見される。stop の活用に関して、ある定期試験の課題作文の中で、2クラス80名中40名が stop の過去形を使つたが、stoped / stopped が同率で出現した。

2) 対策: つづりの規則性の学習と練習

単語集には「つづりと発音の関係」の欄があり、つづりと発音の間の規則性について解説し練習問題を付けている。dinner / diner, supper / super がどうして違う発音になるのかなどの法則性を示し、練習をする。また、生徒に多い間違いについては、定期試験などの生徒の答案から誤答を分析し、つづりと発音の関係の規則性を示して、つづりの練習をし

ている。

3.5.3 接辞と語根・派生辞

1) 問題点: 認識の不足

接辞と語根(語幹)、派生辞の知識は出会った単語の類推や記憶に役に立つものであるが、中学校ではほとんど触れられていない。生徒のノートには、aware, awareness や kind, unkind を全く別個の語として認識していることがしばしば見られる。接辞や派生辞を知っていれば、単語を word family として理解することができ、こうした手間を省くことができる。

2) 対策: 継続的な学習

単語集には、代表的な接辞・語根が出ており、それらを学ぶが、教科書を使った授業では単語の説明時にそれらを使う。派生辞については、教科書の課(Lesson)末に単語の整理欄があり、派生語の例が出ており、それらを使つて、1つの単語を別の品詞に変えたり、逆に派生辞から元の語を類推する練習を継続的に行っている。

3.6 コロケーション

安藤(1991: 372)はコロケーションを「単語と熟語(イディオム)のいわば中間の位置を占め、2語以上の語連結で、意味上ひとまとまりになっているもの」と定義している。塚本(2012: 1)は、コロケーションを(連語)として、「語と語の習慣的な結びつき」とし、「一般的に語彙的コロケーションと文法的コロケーションに分けられる」としている。また、堀(2009: 7)は「コロケーションとは、語と語の間における、語彙、意味、文法等に関する習慣的な共起関係を言う」として、「等」を加えた理由として、文化、レジスター、個人の文体の問題ともかわりがあることを念頭に置いているためとしている。

Nation(2001: 315)は「頻繁に一緒に出現し、ある程度意味的に推論しにくい語の組み合わせをコロケーションと見なすのが、理解しやすいだろう」としながら、広義・狭義で定義が煩雑になることを踏まえて、「この本では、コロケーションを、句や節として一般に受け入れられているどんなグループ化も、コロケーションと大まかに呼ぶことにする」と記している。本研究では、Nationの言うように語

と語の一般的に受け入れられる組み合わせを大まかにコロケーションとして考え、「言葉の組み合わせ」として指導を行った。

3.6.1 問題点：単語の学習が意味を覚えるだけになりがちである

英単語とその訳語を覚えることだけが、単語を覚えることだと思っている生徒が多い。表面的にはそれで何も問題がないように見える。しかし、イディオムの知識、文脈の中での単語の使い方を理解していなければ、作文や会話のときに、自然な英語で表現することができない。また読解やリスニングでも、意味がつかめず、理解ができないことが起こる。また、コロケーションを知っていることで解ける問題が、入試を初め、多くの試験に出題されている。

3.6.2 対策

1) 教科書の語をコロケーションで覚える

教科書のほとんどの新出語について、隣接している関連する語とつなげて1つの単位として慣用語のように覚えるようにしている(例：clap は本文中の clapping their hands のまま覚える)。

授業中の活動としては、コロケーションとして覚えるべき語に下線を引いた教科書本文のプリントを渡し、音読練習を重ねた後、下線部を黒く塗り、音読・シャドウイングを再度行う。さらに筆記テストでも単語1つではなく、コロケーションとして書くことを繰り返している。

2) 単語シートによる新出語とコロケーション関係にある語句の学習

教科書の課ごとに単語シートを作り、新出語とコロケーション関係にある語句を、日本語か、英語かのどちらかで載せ、訳すことを宿題とした。生徒は類推し、わからないときは辞書を引き、シートを完成させ、授業で答え合わせをした。

この活動ができるようになってからは、単語だけを示し、教科書の本文・辞書から、あるいは自分で考えて、短文・短文を作る課題を出している。生徒に提出させ、間違いの傾向を見つけ、授業で示し、文を訂正する。いずれのものも生徒に渡してある「語彙管理ファイル」に綴じさせて見直しができるようにしてある(生徒の書いたシートの例は教授資料2、3で示した)。

3.7 生徒自らの語彙学習把握

3.7.1 問題：目標が現在の試験に備えるだけになっている

授業中指名されて答えられないと困るから、また宿題として出されるから、新出単語は調べてくる。しかし、単語を覚えることになると、目の試験対策だけであり、記憶に定着しているかどうか、学んだ語が活用されているかといった振り返りが行われていない。

3.7.2 対策

1) 語彙の計画的な学習の必要性の説明

4月導入時に、プリントを渡し、中学での学習語彙数、また、高校3年間で学ぶ必要のある語彙数を、語彙学習の必要性や学習方法とともに示した。

2) 語彙管理ファイルの配付

生徒には、A4版の紙ファイルを渡し、朝の単語テストの問題、またその他の語彙に関する活動で使った配布物を綴じて、必要なときに見直しができるようにしてある。

3) 朝の単語テストの成績の提示

11月には、朝の単語テストの成績が、前期と後期でどのように変化しているかを表にして、各生徒に成績の変化を示した。

4) 教科書語彙習得確認テスト

2月には、英語I教科書の新出単語の習得に関するテストを行った。教科書の新出語約500語のうち、2月までに学んだ9課(9 Lessons)から均等に計50語を選び、次のような設問で予告なしのテストを行った。

a.(I) 示された語の意味を日本語で書く

b.(II) 示された語を使って短文・短文を作る

(I)については模範解答を示し、各問1点で自己採点をさせた。(II)については、内容の正確さを問わずに、文を作れば、各問1点とした。

「できた数を2倍することで、英語Iの教科書の単語の何%が覚えられたか」がわかると示し、できた数と%を記入させ、自分がどれくらいの語彙を習得したかの目安の1つとした(生徒の答案例は、教授資料4で示した。また結果は、統計資料2表18で示した)。

なお、このテストは検証のための資料としても使われるものである。

4 検証のための資料

4.1 検証のための資料

検証のために、1) 語彙学習方略についてのアンケートの結果(10月)、2) 単語テストの全生徒の成績、3) 「どのようなことを努力したか」、「どのような力が伸びたか」を質問事項とする記述のアンケート(10月)、4) 「3.7 生徒自らの語彙学習把握」で使った「教科書語彙習得確認テスト(2月)」の成績、5) 語彙学習方略と単語テスト・全国規模の模擬試験(進研模試)の成績との相関、の5つの資料を使う。

ただし、1)は論文中に示すが、2)は、統計資料1として、表15から表17として、また4)は、統計資料2表18で、5)は統計資料3表19として示した。また3)は検証の必要に応じて示した。

なお、検定のためのソフトウェアは、「エクセル統計2012」(株式会社 社会情報サービス 東京)を使った。

4.2 語彙学習方略についてのアンケート

Schmitt(2000)の分類法をもとに野呂(2003:299)の作成したリストから、32項目のパイロット調査を行い、実際的でないものを削り、25項目にまとめて、本調査を行った。

アンケートでは、VLSの使用について、「1-全くそうではない、2-そうではない、3-ややそうではない、4-ややそうである、5-そうである、6-とてもそうである」の6つのリッカートスケールを用いて、次の2つの点について尋ねた。

A. 現在、その方法を使っている。

B. その方法は、高校で語彙の勉強の仕方を学んでから始めた。

その結果、有効な回答は271、尺度内の一貫性を示すクロンバックの α は、A、Bともに、どの項目も0.8以上であった。アンケートの結果は、表3のとおりである。また、項目について因子分析を行った。その結果は統計資料4表20に示した。

5 結果の検証と考察

改善項目として挙げた6つの事項と、アンケートで尋ねたVLS項目の関連は、表4に示すとおりである(直接関連のない項目は省いてある)。

5.1 教科書の語彙

5.1.1 結果

1) アンケートの結果から—中学時との比較

各項目の6スケールから①「その方略を使っている」と答えた数($A \geq 4$)、②「使っている」と答えた数の全体との比率、③「高校で始めた」と答えた数($A \geq 4$ かつ $B \geq 4$)④「中学からやっていた」と答えた数($A \geq 4$ かつ $B \leq 3$)、⑤「高校からと答えた数」と「中学からやっていた数」の比率を求めた。

表5では、Aの平均、①使用総数、②全体比率、③高校から、④中学から、⑤高校／中学として示した。

以下、結果の検証にはこの数値を示す。

2) 2度の単語テストの結果

各課(Lesson)の2度目の試験は、学んだ語彙の記憶保持の割合を見ることなく、1度学んだ語彙の復習を習慣化させることを目的としている。したがって、第2回目のテストは必ず予告されて出題された。対応のあるt検定での2回のテストの結果は表6のようであった。

5.1.2 考察

表5に示したVLS項目は、計画性や繰り返しての練習といったメタ認知的方略が関係している。アンケートの結果は、どの項目も、「中学から使用」、「高校から使用」とともに60から70人台であった。

教科書語彙習得確認テストの成績(統計資料2表18)による1年末の語彙の保持を見ると、平均で50語中33語、およそ66%の単語の意味を覚えていた。

この時期にどれほどの語彙が保持されているかのデータはないが、上岡(1982)の高校生を対象とした単語テストでは、1度記憶された語が、復習をし

■ 表 3：VLSに関するアンケートの結果 $n = 271$

NO	分類	VLS項目	A		B	
			mean	SD	mean	SD
1	1 DET	テキストの脈絡から意味を推測する	4.5	1.13	2.9	1.53
3	1 DET	接辞 (接頭辞, 接尾辞) と語根を分析する	3.6	1.41	3.9	1.66
7	1 DET	動詞は活用 (過去・過去分詞) も覚える	4.7	1.14	2.9	1.67
8	1 DET	日本語化した語ではないかと考える	3.7	1.56	2.7	1.44
18	1 DET	文の理解のために, 品詞を推量する	3.6	1.43	3.2	1.56
24	1 DET	辞書は, 解説も読み, 関連語も調べる	3.4	1.39	3.1	1.60
12	2 SOC	調べたり覚えたりするときに, 友達と協力する	3.0	1.45	2.8	1.51
19	2 SOC	教師に新しい語について尋ねる	2.3	1.21	2.5	1.48
6	3 MEM	新出語で文を作り, trying みる	2.6	1.44	2.6	1.52
9	3 MEM	新出語を体験や以前習った語と関連づける	3.5	1.46	2.9	1.52
10	3 MEM	CDや発音記号で正しい発音を確認する	4.1	1.42	3.8	1.73
11	3 MEM	同意語, 反意語も調べ, 一緒に覚える	3.0	1.27	3.3	1.59
13	3 MEM	キーワード法*を使う	2.9	1.57	2.9	1.66
14	3 MEM	覚えやすいようにグループ分けする	2.9	1.35	2.8	1.48
16	3 MEM	前後の語を意識しながら書いて覚える	3.9	1.36	3.3	1.55
17	3 MEM	文の意味を考え, 何度も音読して覚える	3.7	1.33	3.3	1.56
2	4 COG	学んだ語の単語リスト・単語帳を作っている	2.9	1.61	2.4	1.54
15	4 COG	新しい語を何度も発音して覚える	4.3	1.34	3.0	1.58
25	4 COG	正しいつづりを意識して書いて覚える	5.0	1.12	3.0	1.78
4	5 MET	目標を決めて単語を学び続けている	3.4	1.5	2.9	1.57
5	5 MET	学校で習う語以外に単語帳を作っている	2.6	1.45	2.7	1.61
20	5 MET	単語集を利用する	4.3	1.43	3.2	1.67
21	5 MET	基礎英語など, 教材以外の手段を利用する	3.2	1.65	2.7	1.65
22	5 MET	間隔をあけて単語の復習をする	3.4	1.36	3.0	1.57
23	5 MET	単語テストをやり, 覚えているか試してみる	3.7	1.54	3.0	1.64

(注)*キーワード法＝母語にある似た発音の語を利用する方法 (例: occur, 「なんか起きたか, おっかあ?」)

Schmitt の分類の略語は, 次のものを示している。

1 DET (determination strategies: 決定方略) 2 SOC (social strategies: 社会的方略)

3 MEM (memory strategies: 記憶方略) 4 COG (cognitive strategies: 認知的方略)

5 MET (metacognitive strategies: メタ認知的方略)

■ 表 4：指導法とVLSの関連 (重複するものはイタリック太字で示した)

指導事項	指導と関連する VLS
1) 教科書の語彙の繰り返し	4, 22, 23 (MET)
2) 単語集の活用	4, 20, 22 (MET)
3) 副読本	1, 18 (DET)
4) 語彙に関する基本事項	10, 11 (MEM), 15, 25 (COG), 3 (DET)
5) コロケーション	6, 16, 17 (MEM), 24 (DET)
6) 語彙学習の把握	4, 5, 21, 22, 23 (MET), 2 (COG)

■表 5：教科書の語彙の繰り返しとVLSとの関係

① 使用総数 ② 全体比率 ③ 高校から ④ 中学から ⑤ 高校／中学

NO	分類	VLS項目	mean	①	②	③	④	⑤
23	5 MET	単語テストをやり、覚えているか試してみる	3.7	157	0.58	78	79	0.99
4	5 MET	目標を決めて単語を学び続けている	3.4	135	0.50	64	71	0.90
22	5 MET	間隔をあけて単語の復習をする	3.4	129	0.48	60	69	0.87

■表 6：教科書からの出題 1・2回目の差の検定

	1回目平均	2回目平均	n	対の差の平均	t値	有意確率	効果量(d)	間隔(日数)	2回目の試験形態
1 課	72.66	48.20	259	-24.85	-16.42	0.00	-1.21	102	課題テスト
2 課	68.55	48.17	254	-20.33	-15.89	0.00	-0.97	112	定期試験
3 課	60.91	66.98	106	5.19	2.40	0.02	0.25	39	課題テスト
4 課	54.45	56.24	109	3.67	1.81	0.07	0.17	53	定期試験
5 課	50.61	70.49	266	19.94	19.73	0.00	0.94	41	課題テスト

なければ、20日後には、4.8%になることを示している。

教科書から出題した単語テストの1・2課の試験では、2回目の方が1回目よりもはるかに低い成績であった。3課と4課については、3クラスしか資料が取れなかったが、1月半後の試験で、1回目よりも成績が伸びている。5課については、1回目よりも有意に成績が伸びている。

2度の単語テストの差を見ると、次のことが考えられる。初めの頃は、教科書の単語の復習をすることを習慣として身につけている生徒が少なかったため、第1回目の4か月後に行われた1・2課は忘却率が高くなり、それを回復するような努力がなされないままに試験に臨んでいた。しかし、2回目のテストを重ねるうちに、徐々に教科書の単語を復習することを当たり前のこととして受け取るようになり、復習をするようになった。

以上の点を考えると、指導によってVLS項目23、4、22を身につけた生徒の数が増えたと考えられる。

5.2 単語集

アンケートの結果(表7)

20の単語集などの利用は、生徒が学年全体で同じ単語集を持っており、必ずしも自主的な活動につながることは意味していないが、与えられたものにする自分から選んだものにする、多くの生徒が単語集を使って学ぶことを、方略として意識していることを表している。項目4は、22と同様の数と変化を示している。

記述によるアンケートでは、「どのようなことを努力したか」、「どのような力が伸びたか」を質問事項として尋ねた(3クラス、109名を集計)が、そのうち、語彙学習関連の言及で数が多かったのは、「単語・語彙を増やす」(66名)であり、単語を意識して学んでいることを示している。

しかし、(統計資料1表16)の示すように、単語テストの平均点が13回51.39点から22回40.69点と回が下がるにつれて徐々に落ちているのは、単語集の中に未学習の語が増えてきたために、つづりまでを覚えることが困難になってきた生徒が増えたためと

■表 7：単語集の指導とVLSとの関係

① 使用総数 ② 全体比率 ③ 高校から ④ 中学から ⑤ 高校／中学

NO	分類	VLS項目	mean	①	②	③	④	⑤
20	5 MET	単語集を利用する	4.3	203	0.75	99	104	0.95
22	5 MET	間隔をあけて単語の復習をする	3.4	129	0.48	60	69	0.87
4	5 MET	目標を決めて単語を学び続けている	3.4	135	0.50	64	71	0.90

思われる。

以上の点から、努力して単語を学ぶ生徒の数が増えたことが考えられる。しかし、4と22の数は、目標を決め、継続的に単語の復習をする生徒が多くないことを示している。

5.3 副読本

統計資料1表17の朝の単語テストの成績の副読本からの出題の中で、第6回は単語を指定せず、副読本の範囲全体から出題する形式となったため、平均が20.82点と低かった。第6回を除いた平均は、61.3点と高い得点となった。副読本を使って語彙を増やすためには、覚えるべき単語を指示し、出題することが有効であると思われる。

模試とVLS項目の相関では、模試の成績と、項目1が $r=0.257$ 、項目18が $r=0.219$ （ともに $n=271$ 、 $p<0.01$ ）で、弱い相関関係がある。1に関して、水本・竹内（2009: 5）が「語彙習得という点で文脈からの類推は必ずしも、学習に結びつかない」としてアンケートから除外していることが示すように、1は読解に関係する事項である。18の「高校から始めた」数の増加は、高校になってから、品詞を推量するために必要な派生辞を学んだことと関係しているのであろう。1とともに類推を用いることから、読解の方略でもある。派生辞を学ぶことで、品詞を推量できるようになり、読解の方略として使われたと考えられる。

5.4 語彙に関する基本事項

5.4.1 正確な発音と発音記号

発音記号を含め、正確な発音を意識する方略は、高校になって始めたこととして意識している生徒が

多い。発音記号は、1人で単語を学ぶことのできる「自立的な学習者になるためには」不可欠なもの（相澤・望月, 2010: 236）であり、生徒自身もそのことに気がついているようである。記述による生徒のアンケートには、「発音記号がわかるようになり、新出単語を読めるようになってきた」、「発音記号を覚えたので見知らぬ単語が出て辞書で調べて、発音することができるようになった」とある。また、109人中11名が発音記号を「努力したこと・力の伸びたこと」として書いている。

継続的な発音記号の指導によって、発音記号を含む発音に関する語彙学習方略を身につける者が増えたと思われる。

5.4.2 つづりの規則性

項目25と単語テストの合計との間には $r=0.250$ （ $n=271$ 、 $p<0.01$ ）の弱い相関が認められた。単語のテストで、つづりまで正確に書くことを要求したことと関係していると思われる。

24年度の新入生の特徴として「スペルを正しく書くことができない」と指摘されている（ベネッセコーポレーション, 2012: 3）。つづりに関する事項をVLSの項目として加えた理由は、年を追うごとに入学する生徒たちのつづりの正確さが低下していることによる。

中学時代からつづりを意識して単語を覚える生徒が148名で多いことを示しているが、98名の生徒が、高校になってから正しいつづりを意識して覚えるようになっている（表10）。つづりの法則や、発音とつづりの関係を学ぶことで、また書いて覚える練習を繰り返すことで、正しいつづりを意識して覚える方略を身につけた生徒が増えていると考えられる。

■ 表 8：副読本の指導とVLSとの関係

① 使用総数 ② 全体比率 ③ 高校から ④ 中学から ⑤ 高校／中学

NO	分類	VLS項目	mean	①	②	③	④	⑤
1	1 DET	テキストの脈絡から意味を推測する	4.5	240	0.89	87	153	0.57
18	1 DET	文の理解のために、品詞を推量する	3.6	144	0.53	72	72	1.00

■ 表 9：語彙に関する基本事項の指導とVLSとの関係

① 使用総数 ② 全体比率 ③ 高校から ④ 中学から ⑤ 高校／中学

NO	分類	VLS項目	mean	①	②	③	④	⑤
15	4 COG	新しい語を何度も発音して覚える	4.3	209	0.77	88	121	0.73
10	3 MEM	CDや発音記号で正しい発音を確認する	4.1	195	0.72	124	71	1.75

■ 表10：つづりの規則性の指導とVLSとの関係

① 使用総数 ② 全体比率 ③ 高校から ④ 中学から ⑤ 高校／中学

NO	分類	VLS項目	mean	①	②	③	④	⑤
25	4 COG	正しいつづりを意識して書いて覚える	5.0	246	0.91	98	148	0.66

5.4.3 接辞と語根・派生辞・同意語・反対語

VLS 項目3の「接辞と語根・派生辞」は、中学時代に比べ、3倍近くに、また項目11の「同意語、反意語」は、数は多くはないが、2倍以上に増えている(表11)。

記述によるアンケートには、「中学のときとは違う新しい単語の覚え方を知り、たくさんの単語を覚えられるようになった」というものがあった。岡田(2007)の報告が示唆するように、興味を持って学んだようであった。派生辞に関しては、「1つの単語から形容詞・動詞形・名詞形といくつもの単語を知ることができた」という記述があった。接辞と語根・派生辞、また同意語、反意語は語彙を広げる方略として使われている。

5.5 コロケーション

単語テストと項目16、17で、項目16が $r=0.219$ 、項目17が $r=0.245$ (いずれも $n=271$ 、 $p<0.01$)の弱い相関があった。単語を文脈の中で覚えたり、chunkとして覚えた方が単独で覚えるよりも、記憶の連想網が働き、記憶にとどまりやすい(Nation, 2001: 321)。弱いながらも単語テストとの相関があったことは、コロケーションが単語を覚え保持するのに有効であることを示していると思われる。

項目24の「辞書の使用」は、コロケーション関係

にある語を知るのに必要であるが、まだ十分に利用されていない。指導の機会を増やしたい。また、項目6の「新出語での作文」は、質問が、「文を作り、言ってみる」とあり、2つにまたがったために数が少なくなったものと思われる。書くことは、英語Iでは十分に指導の時間がとれなかった。2年次のWritingで学ばれれば、コロケーションの幅も広がると考えられる。

2月の教科書語彙習得確認テスト(統計資料2表18)では、単語から句や節を作ろうとした数の平均は50題中21であった。また、筆記のアンケートでは、「文中の単語を周りの文とのつながりも考えて覚えることを頑張った」、「単語を文章中にある形で覚えるようになった」などの記述があり、「コロケーションの学習は単語を英語とその訳語をペアで覚えるよりも面倒であるように思われるために、コロケーションについては定着できていない生徒が多い」(相澤・望月, 2010: 118)と言われるが、生徒たちからは、コロケーションを面倒と思わずに身につけようとする様子が見られる。

5.6 語彙学習の把握

記述のアンケートでは「努力したこと」、「伸びたこと」として109名中66名が「単語・語彙を増やす」を挙げている。語彙を増やすべく努力したことは、

■ 表11：接辞と語根・派生辞・同意語・反対語の指導とVLSとの関係

① 使用総数 ② 全体比率 ③ 高校から ④ 中学から ⑤ 高校／中学

NO	分類	VLS項目	mean	①	②	③	④	⑤
3	1 DET	接辞(接頭辞、接尾辞)と語根を分析する	3.6	157	0.58	117	40	2.93
11	3 MEM	同意語、反意語も調べ、一緒に覚える	3.0	100	0.37	71	29	2.45

■ 表12：コロケーションの指導とVLSとの関係

① 使用総数 ② 全体比率 ③ 高校から ④ 中学から ⑤ 高校／中学

NO	分類	VLS項目	mean	①	②	③	④	⑤
16	3 MEM	前後の語を意識しながら書いて覚える	3.9	186	0.69	97	89	1.09
17	3 MEM	文の意味を考え、何度も音読して覚える	3.7	164	0.61	92	72	1.28
24	1 DET	辞書は、解説も読み、関連語も調べる	3.4	127	0.47	64	63	1.02
6	3 MEM	新出語で文を作り、言ってみる	2.6	86	0.32	31	55	0.56

■ 表13：語彙学習の把握とVLSとの関係

① 使用総数 ② 全体比率 ③ 高校から ④ 中学から ⑤ 高校／中学

NO	分類	VLS項目	mean	①	②	③	④	⑤
23	5 MET	単語テストをやり、覚えているか試してみる	3.7	157	0.58	78	79	0.99
4	5 MET	目標を決めて単語を学び続けている	3.4	135	0.50	64	71	0.90
22	5 MET	間隔をあけて単語の復習をする	3.4	129	0.48	60	69	0.87
21	5 MET	基礎英語など、教材以外の手段を利用する	3.2	120	0.44	47	73	0.64
2	4 COG	学んだ語の単語リスト・単語帳を作っている	2.9	105	0.39	44	61	0.72
5	5 MET	学校で習う語以外に単語帳を作っている	2.6	79	0.29	42	37	1.14

語彙を重視した指導によるものと考えられる。

項目2、5の単語帳の作成に関しては、単語集を持ち、教科書の語彙と意味をノートに書き、また課ごとの「語彙シート」でコロケーションまで含めた語彙の練習をし、語彙に関するプリントを綴じておく語彙管理ファイルを使っていれば、必ずしも必要なものではない。すべての生徒に当てはまる方略とは言えないであろう。

項目21が高校での増加が少ないことは課題である。中学時代には、「基礎英語」などを利用していたと思われるが、英語を含め学校から出される課題の量が増えていること、「学校の教材だけやっていれば大丈夫」という指導方針が、学校教材以外の利用に向かわせない理由のように思われる。しかし、英語の場合は、音声面からも、また文化的な理解のためにも多媒体の学習を勧めたい。

5.7 語彙学習方略と単語テスト・模試との相関

外部模試1月の結果と単語テストの平均との間には、 $r=0.637$ で中位の相関があった。模試の成績と単語テストとの相関は、語彙が英語の学力にとって重要な位置を占めているとともに、英語の学力には語彙以外の要素が多く影響していることを示すものであろう。

各項目のうち、1、3、18が模試と、10、16、17、25、5、20が単語テストと弱い相関があった。

模試の成績と相関のある1、18はいずれも文脈の中で意味を類推するものであり、3は語を分析的に理解することと関係している。読解の配点の高い模試においては、そうした類推する能力がかかわっていると考えられる。

単語テストとの相関のある項目のうち、5、20はメタ認知的方略、10、25は正確な発音やつづりを覚

えようとする方略、16、17は文脈の中で文を覚えるというコロケーションを意識する方略である。それらは単語を覚え保持するために不可欠な方略であると考えられる。

単語テストの平均とVLS合計とは $r=0.261$ （いずれも $n=271, p<0.01$ ）であり、単語テストとVLS方略との間には弱い相関があった。しかし、外部模試1月の結果とVLS合計とは $r=0.189$ と相関傾向があったにとどまり、VLS合計と模試の成績との相関は見られなかった。

5.8 因子分析の結果

アンケートの項目について因子分析を行った結果、表14に示す項目が第1因子として確認された。

■ 表14：第1因子として挙がった項目

No	分類	VLS項目	負荷量
15	4 COG	新しい語を何度も発音して覚える	0.6524
17	3 MEM	文の意味を考え、何度も音読して覚える	0.6282
10	3 MEM	CDや発音記号で、正しい発音を確認する	0.5012
16	3 MEM	文の前後の語を意識しながら書いて覚える	0.4792

第1因子は、「音声・コロケーションを重視する方略」と言えるが、10の音声重視、16のコロケーションを意識して書いて覚えることは、いずれも授業において繰り返し指導した方法である。第1因子として上がった項目は、赤瀬（2011）が示唆しているように、「教師の語彙指導の結果が反映」していると考えられる。

6

結論と課題

6.1 結論

本実践の目的は、語彙指導に関係するさまざまな課題の改善を図りながら、学習方略を身につける指導を行うこと、また語彙指導を通して、生徒が語彙学習方略を身につけられることを検証することであった。

報告では、指導の課題とその改善策を具体的に示した。コロケーションの指導では、当初「単語は意味と対で覚えることが単語を覚えることである」という意識が強いため、与えられた語で短句・短文を作ることを生徒は積極的に行えなかった。コロケーションを意識して単語を学ぶまでには、繰り返しの指導が必要であった。授業で重点的に指導した発音記号、単語の保持のための繰り返しの復習についても、そのことは言えることであった。

VLS に関するアンケートやその他の結果の分析からは、語彙を繰り返し学ぶこと、音声の重視、接辞・派生辞などの語彙に関する基本事項を理解し活用すること、コロケーションを意識して単語を学ぶ等の語彙学習方略が、継続的な指導によって身につけられることを示すことができたものと思われる。

以上の点から、今回の実践では、語彙指導の改善を図りながら、指導によって語彙学習方略を身につけられることを実証できたものとする。

6.2 課題

語彙指導に関しては次の2点が課題である。

第1点は、メタ認知的方略に関することである。

1 年次では、語彙の管理や計画性の指導は十分に達成できなかった。語彙をコロケーションとして意識し、文脈の中で理解し覚えることや、接辞や派生辞を学ぶことで、学年が上がるにつれて、語彙が増大するとともに語彙の連想網が大きくなっていく。そのようにして増えてきている語彙知識を、さらに自分の力で広げていくための語彙の管理や計画性を指導していきたい。

第2点は、平成25年4月から始まった、コミュニケーション重視の新指導要領と語彙に関することである。新課程の授業では、インターアクションやアウトプット活動を通して語彙が発表語彙として学ばれる機会が増える。流暢さ (fluency) と正確性 (accuracy) を高めながら、受容語彙を発表語彙に変えていく方法を研究し、授業に生かしていきたい。

謝 辞

本研究を行う貴重な機会を与えてくださった公益財団法人日本英語検定協会の関係者の皆様、並びに選考委員の先生方に御礼申し上げます。とりわけ、私の研究を担当していただいた大友賢二先生には貴重なご助言、励ましを賜りました。深く感謝申し上げます。

また、石川弘校長をはじめ、下妻一高の教職員の皆さん、ともに学んだ生徒の皆さんにあらためて感謝申し上げます。特に1学年の英語をともに担当した木村和広先生、二宮治奈先生、岩井木綿子先生にお礼申し上げます。協議を重ね語彙指導の問題点や改善法を共有することで、語彙指導を深められたばかりでなく、外部模試の結果でも指導の成果を確認することができました。

参考文献 (*は引用文献)

- * 相澤一美・望月正道 (編著). (2010). 『英語語彙指導の実践アイデア集』. 東京: 大修館書店.
- * 赤瀬正樹. (2011). 「高校生の英語語彙学習方略に関する研究: 学習者の語彙レベルに焦点を当てて」. 『中国地区英語教育学会研究紀要: CASELE research bulletin』. no.41. 1-10.
- * 安藤昭一編. (1991). 『英語教育現代キーワード事典』. 大阪: 増進堂.
- * Bachman, L.F. (1990). *Fundamental Considerations in Language Testing*. Oxford: Oxford University Press.
- Folse, K.S. (2004). *Second Language Vocabulary Myths*. *TESL Reporter* 37, 2, 1-13.
- * 平野絹枝・赤松信彦・姉崎達夫. (2001). 「日本人中学生・高校生の英語語彙学習方略: 学習経験年数と性差

- の影響」. 『上越教育大学研究紀要』. No.20, 459-472.
- * 堀正広. (2009). 『英語コロケーション研究入門』. 東京: 研究社.
- * 泉恵美子. (2006). 「語彙を増やす指導」. 門田修平 (編著). 『英語語彙指導ハンドブック』. 東京: 大修館書店.
- * (株) ベネッセコーポレーション. (2012). 『茨城県英語指導研修会資料』. 門田修平・池村大一郎 (編著). (2006). 『英語語彙指導ハンドブック』. 東京: 大修館書店.
- * 上岡光雄. (1982). 「英単語は学習された後、どのように忘れられてゆくか」. 『英語教育』, 31, 8, 42-47. 東京: 大修館書店.
- * 金谷憲. (2009). 『教科書だけで大学入試は突破できる』. 東京: 大修館書店.

- * 川 貞夫.(1993).「副読本の指導」.『現代英語教育』, 7 月号, 11-13. 東京: 研究社出版.
- * 水本 篤・竹内理.(2009).「語彙学習法略と TOEIC スコア—その関係の詳細な考察—」. 財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会.
- * 望月正道・相澤一美・投野由紀夫.(2003).『英語語彙指導マニュアル』. 東京: 大修館書店.
- Moir, J., & Nation, I.S.P. (2002). Learners' use of strategies for effective vocabulary learning. *Prospect Vol.17*, No.1 April 2002, 15-35.
- 文部科学省.(2009).「高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編」.
- Nation, I.S.P. (1990). *Teaching and Learning Vocabulary*. Boston. MA: Heinle & Heinle.
- * Nation, I.S.P. (2001). *Learning vocabulary in another language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- * 野呂 忠司 (2003). 門田修平 (編著).『英語のメンタルレキシコン』. 東京: 松柏社.
- * 岡田いずみ.(2007).「学習方略の教授と学習意欲—高校生を対象にした英単語学習において—」.『教育心理学研究』. 55: 287-299.
- * Oxford, R. (Ed.) (1990). *Language Learning*

- Strategies*. New York: Newbury House Publishers.
- * Schmitt, N. (2000). *Vocabulary in Language Teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.
- * Schmitt, N. (2002). Schmitt, N. Current Perspective on Vocabulary Teaching and Learning: 827-841, Schmitt, N. (Ed). *An introduction to applied linguistics*. London: Arnold.
- * Schmitt, N., & McCarthy, M. (1997). *Vocabulary: Description, Acquisition and Pedagogy*. 199-227, Cambridge: Cambridge University Press.
- * Schmitt, N., & Schmitt, D.R. (1993). Identifying and Assessing Vocabulary Learning Strategies. *Thai TESOL Bulletin*. v5 n4: 27-33.
- 執行正治.(2011).「教科書を使い倒す語彙指導」.『高校英語教育』2011 夏号, 10-13. 東京: 三省堂.
- http://tb.sanseido.co.jp/english/h-english/h-e_pr.html, magazine2011
- 高梨芳郎.(2009).『〈データで読む〉英語教育の常識』. 東京: 研究社.
- * 塚本倫久.(2012).『プログレッシブ 英語コロケーション辞典』. 東京: 小学館.

資 料・・

統計資料 1：朝の単語テストの成績

■ 表 15：テストの結果基本統計：教科書からの出題と2回目のテスト

回数・課	n	平均	標準偏差	95% 信頼区間		中央値	最小値	最大値	尖度	歪度
				下限値	上限値					
3・1 課	263	72.66	20.36	70.20	75.12	75	5	100	0.10	-0.82
5・2 課	258	68.55	19.81	66.13	70.96	70	5	100	-0.07	-0.58
11・3 課	253	60.91	26.20	57.68	64.14	65	0	100	-0.66	-0.44
12・4 課	262	54.45	21.88	51.80	57.10	55	0	100	-0.63	-0.09
15・5 課	270	50.61	20.62	48.15	53.07	50	0	95	-0.79	-0.03
18・6 課	264	66.59	25.91	63.47	69.72	70	0	100	-0.70	-0.59
2 回目のテスト										
3・1 課	266	48.20	20.89	45.68	50.71	45	5	100	-0.57	0.26
5・2 課	265	48.17	22.24	45.49	50.85	45	5	95	-0.76	0.23
11・3 課	116	66.98	19.81	63.38	70.59	70	5	100	0.19	-0.54
12・4 課	113	56.24	20.96	52.37	60.10	55	10	100	-0.56	-0.10
15・5 課	267	70.49	21.94	67.86	73.12	75	5	100	0.04	-0.79

■ 表16：単語集からの出題

回	n	平均	標準偏差	95% 信頼区間		中央値	最小値	最大値	尖度	歪度
				下限値	上限値					
1	261	58.62	18.86	56.33	60.91	60	10	100	-0.48	-0.01
4	265	67.08	20.89	64.56	69.59	70	5	100	-0.45	-0.55
9	263	36.62	21.54	34.01	39.22	35	0	100	0.00	0.61
13	269	51.39	23.64	48.57	54.22	50	0	100	-0.91	0.08
17	268	49.76	21.27	47.21	52.30	50	10	95	-0.83	0.21
19	255	48.96	19.53	46.56	51.36	50	0	90	-0.72	0.02
22	248	40.69	26.46	37.39	43.98	35	0	100	-0.99	0.38

■ 表17：副読本からの出題

回	n	平均	標準偏差	95% 信頼区間		中央値	最小値	最大値	尖度	歪度
				下限値	上限値					
2	256	42.11	20.08	39.65	44.57	40	5	90	-0.70	0.14
6	261	20.82	16.33	18.84	22.80	15	0	80	1.73	1.33
8	265	69.38	23.84	66.51	72.25	75	10	100	-0.71	-0.66
10	248	65.00	28.93	61.40	68.60	72.5	0	100	-0.81	-0.63
14	253	35.32	16.69	33.26	37.37	35	0	85	-0.12	0.05
16	256	61.09	24.72	58.07	64.12	70	0	95	-0.50	-0.75
20	247	86.07	17.32	83.91	88.23	90	10	100	3.40	-1.87
23	262	69.79	17.49	67.67	71.91	75	20	100	-0.06	-0.71

教科書からの出題21回は降雪のため資料に入れていない。副読本20回は副読本の語彙が既習済の語が多く高い成績となった。単語集9回、副読本6回、14回は出題形式が異なったので、平均や標準偏差が大きく違っている。それらはイタリックの太字で示した。それ以外はいずれも尖度、歪度が±1.0以内であり、大きく正規分布から外れたものではないと考えられる。

統計資料2：教科書語彙習得確認テストの成績

■ 表18：テストの結果基本統計：教科書語彙習得確認テスト

テスト種	n	平均	標準偏差	95% 信頼区間		中央値	最小値	最大値	尖度	歪度
				下限値	上限値					
I	260	33.17	9.08	32.07	34.27	33	7	50	-0.51	-0.20
II	241	21.64	12.29	20.09	23.19	21	0	49	-0.97	0.01

2月に教科書新出単語約500語から50語を選び行った予告なしの単語テストの結果。

意味が書けた英単語の総数をI、また、それらの語で短文や短文を作れた単語数をIIとして、総計を出した。IIの短文や短文を書く間は、コロケーションとして正しいかどうかを問うものではなく、単語から関連する語や句を、すぐに想起できるかを問うものである。

統計資料3：模擬試験および単語テストとVLS項目との相関

■ 表19：模擬試験および単語テストとVLS項目との相関

相関	進研	単語 テスト 平均	VLS項目			単語 テスト 平均	VLS項目						
			1	3	18		全	10	16	17	25	5	20
r=		0.637	0.257	0.252	0.219		0.261	0.224	0.219	0.245	0.250	0.237	0.211

$n = 271, p < 0.01$

1月に実施（実施人数：473,534）した全国規模の模擬試験の成績の校内偏差値と、VLSの個別の項目および単語テストの成績の相関を調べ、 $p < 0.01$ で相関のあったものを表にした。

統計資料 4：因子分析の結果

固有値スクリープロットの値から因子を 6 つとし、因子負荷量 0.4 以上を因子ごとにまとめた（網掛けは負荷量が 0.4 以上を示している）。

■ 表 20：因子分析の結果 $n=271$

因子	No	分類	項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6	共通性
1	15	4 COG	新しい語を何度も発音して覚える	0.6524	0.0566	0.1134	0.0631	0.0270	0.1797	0.4786
	17	3 MEM	文の意味を考え、何度も音読して覚える	0.6282	0.2469	0.1685	0.0578	0.1696	0.0262	0.5167
	10	3 MEM	CD や発音記号で正しい発音を確認する	0.5012	0.0635	-0.0435	0.2956	0.2017	0.1145	0.3983
	16	3 MEM	前後の語を意識しながら書いて覚える	0.4792	0.0986	0.2626	0.2862	0.1754	-0.0293	0.4218
2	2	4 COG	学んだ語の単語リスト・単語帳を作っている	0.0412	0.7142	0.1016	0.0069	0.0685	0.0208	0.5273
	5	5 MET	学校で習う語以外に単語帳を作っている	0.1590	0.5336	0.1607	0.2768	0.0670	0.0156	0.4171
	20	5 MET	単語集を利用する	0.2561	0.4336	0.0246	0.0575	0.1996	0.2370	0.3535
	22	5 MET	間隔をあけて単語の復習をする	0.3547	0.4031	0.3413	0.1559	0.0698	0.1202	0.4484
3	13	3 MEM	キーワード法を使う	0.0514	-0.0463	0.5160	0.0402	0.0634	0.1069	0.2881
	19	2 SOC	教師に新しい語について尋ねる	0.0836	0.2104	0.4885	0.1651	0.1422	0.0248	0.3380
	12	2 SOC	調べたり覚えたりするときに、友達と協力する	0.0565	0.0665	0.4339	0.0679	-0.0102	-0.0003	0.2006
	4	5 MET	目標を決めて単語を学び続けている	0.3148	0.3704	0.4275	0.1085	-0.0074	0.1049	0.4418
	6	3 MEM	新出語で文を作り、言ってみる	0.0524	0.1512	0.4064	0.1499	0.2523	0.0362	0.2783
4	11	3 MEM	同意語、反意語も調べ、一緒に覚える	0.1475	0.2398	0.2545	0.6176	0.1331	-0.0229	0.5437
	18	1 DET	文の理解のために、品詞を推量する	0.1660	0.0503	0.2298	0.4909	0.2242	0.1655	0.4015
	1	1 DET	テキストの脈絡から意味を推測する	0.1946	-0.1035	0.0638	0.4344	0.2187	0.3693	0.4255
	7	1 DET	動詞は活用（過去・過去分詞）も覚える	0.2790	0.1677	0.1853	0.4156	-0.0834	0.2678	0.3917
5	8	1 DET	日本語化した語ではないかと考える	0.0428	0.0073	0.0508	0.1256	0.6569	0.0956	0.4609
	9	3 MEM	新出語を体験や以前習った語と関連づける	0.1164	0.1391	0.1479	0.1393	0.5139	0.0736	0.3436
6	14	3 MEM	覚えやすいようにグループ分けする	0.1194	0.0443	0.0761	0.1652	0.2078	0.5651	0.4118
		寄与率		8.08%	7.30%	7.02%	6.66%	5.56%	3.73%	
		累積寄与率		8.08%	15.38%	22.40%	29.06%	34.62%	38.34%	

それぞれの因子は、次のように名づけることができる。第 1 因子：正しい発音や、語のつながりを意識して学ぶ「音声・コロケーション重視方略」、第 2 因子：単語帳を作り、間隔を空けて復習をする「自己管理的方略」、第 3 因子：周りとの協力と、覚え方に注意を向ける「社会的・記憶的方略」、第 4 因子：語の分析や文から類推をする「分析的方略」、第 5 因子：日本語や以前習ったことの関連を使う「関連づけ方略」、第 6 因子：「グループ分け方略」

教授資料 1：朝の単語テストの例

一学年第15回単語テスト LESSON 5 TOFU: A WORLD FAVORITE

Friday, November 09, 2012

() 内に英語を1語入れなさい。[ただし, () 内に語数の指示があるときはそれに従うこと。() 内に日本語があればその語を, またアルファベットがあればその文字で始まる英語を書きなさい。また, 文頭にある語は大文字で始めること。時制, 活用に気をつけること]

PART 1

Around the eighth century, Japanese monks went over to China to study (1. 仏教) . These monks brought back tofu, miso, and soy sauce to Japan, together with new (2. 知識) and ideas.

PART 2

At first, tofu was too expensive for most people. Eating tofu became popular among common people in the Muromachi era. The Japanese also developed their own ways of making tofu. Japanese tofu became softer and new kinds of tofu, (3.) as deep-fried and freeze-dried tofu, were (4. 発明する) . In the Edo era, newly (4. 発明する) kinds of tofu (5. 広まった) across Japan, and one cooking book had more than 100 different tofu dishes.

In 1613, the British Captain John Saris visited Japan and wrote in his diary: "The Japanese have a lot of cheese, but eat (6. n-) butter nor milk." He thought that tofu was a kind of cheese.

In China and other Asian countries, tofu developed in different ways. They have various types of tofu which we cannot find in Japan. Some are softer, some harder, some rather drier. They have various shapes: thin-sliced, round; tofu noodles, tofu chips, and so on. There are also various kinds of flavors. Some do have the smell and taste of strong cheese, while (7.) have a coconut, curry, or sweet flavor.

PART 3

"The tofu road" that started in China does not end in Japan or in Asia. Tofu has become popular around the world because it is not only rich in (8. たんぱく質) but also low in fat. It is thought of as an (9. 理想的な) health food.

The United States is now one of the tofu-loving countries. The first Americans who took a great interest in tofu were the hippies in the 1960s. Many of them did not eat meat. They (10. p-, 好んだ) natural, healthy food. Tofu was the perfect answer. They ate tofu, however, without any sauce. People came to think of (11. 味の無い) tofu as one symbol of their unusual lifestyle.

In 1975, The Book of Tofu was (12. 出版された) . In (13. 当時, 2語) , more and more people were beginning to (14. 心配する, 2語) health problems caused by eating too much fat. The book changed people's minds about tofu. A (15. 伝統的な) food of the past became "a food of the future."

(16. 徐々に) tofu was put on the (17. 棚) of supermarkets across America.

PART 4

While the Japanese have a long tradition of loving the simple taste of tofu dishes such as yudofu and hiyayakko, the Americans, the new students studying at tofu school, are making their (18. 自身の) tofu culture.

In supermarkets in America, we can find the same kinds of tofu as in Japan, but also many new kinds such as teriyaki-flavored tofu, sesame- and ginger-flavored tofu, and mango- and wasabi-flavored tofu. You can cook them quickly just by warming them up.

There are an (19. 増え続ける) number of vegetarians and health- (20. 意識する) people in the United States.

1	2	3	4
5	6	7	8
9	10	11	12
13	14	15	16
17	18	19	20

_____組 _____番・氏名_____ 得点_____

教授資料 2 : 課ごとの語彙シート

NO	A	B	C	word	発音	meaning	usage (短文)
Lesson 8 : 高橋自主学習シート 3月13日全員必ず提出 語彙の記憶を確かめるためにしよう。①独力で意味を書く。②教科書・ノートで確認し、意味が書けていなければ赤丸。できなければ意味を書き添えておく。③例文を添書。教科書から、あるいは自分で考えて書							
1				funny	フナィ	His picture is funny	
2				device	デバイス		
3				solar	太陽系	solar system	
4				seem	〜に見える	He seem good boy	
5				surface	表面	surface of the earth	
6				intelligent	知的	The intelligent creature	
7				illusion	幻影	It's illusion	
8				belief	信用、信念	Belief is important	
9				claim	主張する	I claimed safety	
10				knock	たたきつける	A storm knocked a storm	
11				tiny	小さい	a tiny primitive device	
12				primitive	原始的		
13				conclude	結論づける	He concluded	
14				launch	〜を打ち上げる	They launched a rocket	
15				contact	接点、連絡	I tried to contact with him	
16				proof	証拠	She don't have proof	
17				mysterious	神秘的	A mysterious accident was happened	
18				remain	〜の残る		
19				unexplained	説明できない	The cause is unexplained	
20				amount	量	a amount of money	
21				data	データ	Data of Japanese	

Class () No. () Name ()

教授資料 3 : 模試問題からの語彙シート

NO	A	B	C	word	発音	meaning	usage (短文)	Japanese
模試問題から語彙を採るためのWorksheetです。何度も見直して、ABCにチェックを入れましょう。 ①は、英語を見て意味が書ける。②は日本語を見て英語を発音でき、正しく読める。③はその語を使って短文節を作る。(例外発音は発音記号を書く)								
例				surface	[sʌr'fɪs]	表面	the surface of Mars	火星の表面
1				get married		結婚する	She is -ing - tomorrow	彼女が明日結婚する
2				except for		〜を除いて	the weather	天気を除いて
3				wedding		結婚式	The - was held	結婚式が
4				the weather forecast		天気予報	- is correct	天気予報が正確である
5				dazzling		すごい(明るい)	a - , sunny day	すごい(明るい)天気の日
6				be sure (that)		〜が確か	- that it is true	それが確かである
7				forecast		予測する	- future	将来を予測する
8				prediction		予言	make a -	予言する
9				battle		戦争、戦闘	purpose to do -	戦争を目的とする
10				forecaster		予報士	study to become -	予報士の勉強をする
11				make an observation		観測をする	- about the difference	差を観測する
12				reward		褒美、報酬	get a -	褒美を受ける
13				in danger of -ing		〜の危険にさらされている	in danger of losing	失う危険にさらされている
14				a matter of life and death		生死に関わる問題	think about -	生死に関わる問題について考える
15				cause - O - to		原因	The injury caused him to lose his job	怪我の原因で彼が仕事を失った
16				overflow		溢れる	with gratitude	感謝で溢れる
17				bank		土手	sit on the -	土手に座る
18				a great deal -		とても	Ten is - better today	今日は10の方がいい
19				get an idea of -		〜がわかる	- how to use	〜の使い方がわかる

name ()

教授資料 4 : 教科書語彙集修得確認テスト

NO	A	B	C	word	meaning	usage (短文・短文)
語彙確認テスト一次の基準で○をつける。Cの意味が書けた。Bすぐに理解出来る語。A短文・句を作れた。						
1				equal	等しい	A equal B
2				environmental	環境	environmental pollution
3				organization	組織	Olympic organization
4				generation	世代	young generation
5				adult	大人	the man is adult
6				destruction	破壊	
7				extinct	絶滅した	
8				billion	十億	
9				unique	ユニーク	unique idea
10				invent	発明する	The man invented telephone
11				breathe	息を吸う	take a breath
12				run after	追いかける	The dog is running after the boy
13				instrument	楽器	
14				take place	開催される	The baseball game took place in Tokyo
15				take part in	参加する	take part in soccer
16				discuss	議論する	Everyone is discussing the problem
17				aware	気づく	
18				material	材料	
19				communicate	コミュニケーション	
20				skeptical	懐疑的	
21				solve	解決する	
22				compare	比較する	I compare the boy to the girl
23				proud of	誇りに思う	I proud of you
24				make sure (that)	確かめる	
25				except	〜を除いて	
26				secret	秘密	I have a secret
27				retire	退職する	I retired the company
28				inspire	励ます	
29				probably	おそらく	You probably play the game
30				neither / nor	〜も〜も	Neither stand nor rice
31				thin	薄い	The boy is thin
小計	19	19				

Class () No. () Name ()

NO	A	B	C	word	meaning	usage (短文・短文)
語彙確認テスト一次の基準で○をつける。Cの意味が書けた。Bすぐに理解出来る語。A短文・句を作れた。						
32				ideal	理想	
33				prefer	好む	I prefer Japan
34				healthy	健康な	healthy food
35				perfect	完璧	perfect performance
36				tradition	伝統	Japanese tradition
37				distant	遠い	The bank distant from here
38				similar	似ている	A is similar to B
39				opposite	反対側	opposite side
40				motivate	モチベーション	
41				ancestor	祖先	The family is our ancestor
42				experience	経験	good experience
43				occur	起こる	A tragic accident could occur
44				landmine	地雷	a lot of landmine
45				decision	決意	
46				influence	影響	
47				graduate	卒業	I graduated junior high school
48				agricultural	農業	agricultural college
49				purpose	目的	the purpose is very difficult
50				worthwhile	価値がある	The work is worthwhile
小計	15	15				
計	34	34				

Class () No. () Name ()